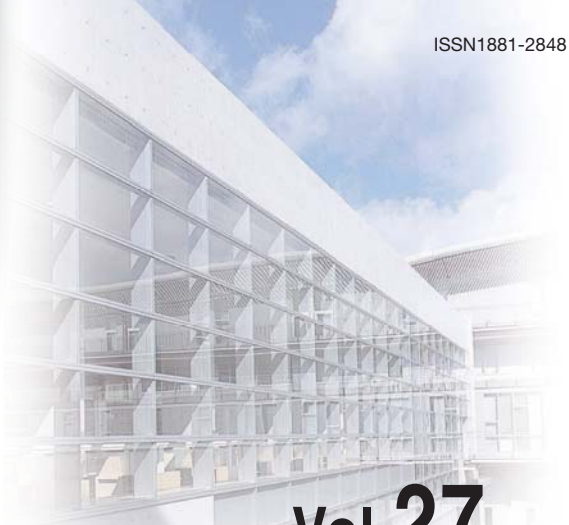
ISSN1881-2848

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

温故知新

Shizuoka University of Art and Culture Library News



2015. 12 Vol.27

平成27年12月発行
発行所　静岡文化芸術大学　図書館・情報センター
〒430-8533　浜松市中区中央二丁目1番1号
TEL(053)457-6124　FAX(053)457-6125
http://www.suac.ac.jp/library/

Contents

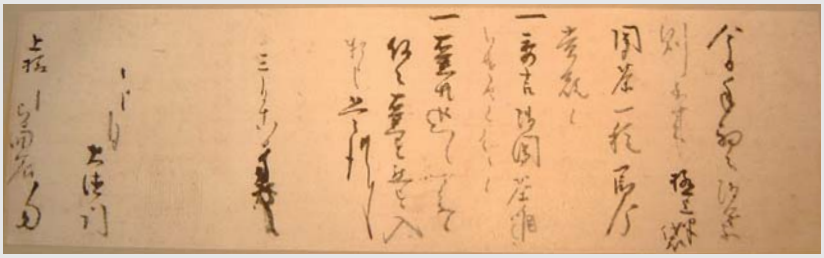
■表紙
「新茶受取りの文」 ❶

■図書館散歩
本との出会いと図書館の記憶 ❷
文化政策学科長 教授
森 俊太

エロス・タナトス ❸
デザイン学部長 教授
海野 敏夫

■特集
わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～ ❹

■巻末
図書館ニュース ❽



「新茶受取りの文」 上林掃部宛 個人蔵

『手紙で読む千利休の生涯』同朋舎メディアプラン, 2007.12 [791.2/Se 71]

わび草庵の茶を大成させ、「茶聖」と称される茶人、千利休。今回ご紹介するのは、天正9年(1581年)頃、利休が上林掃部丞に宛ててしたためた、自筆の書状です。書状の終わりに「自大徳門」とあることから、利休が京都の大徳寺門前の屋敷に於いて、この書状をしたためたことがわかります。

この書状を宛てた上林掃部丞とは、宇治の茶師であった上林久茂のことと考えられます。書状の冒頭に「今日、手初めの御葉、則ち到来。極上半袋、聞茶一種、即ち今賞翫候」と記されていることから、これは利休が初摘みの新茶を贈られたことへの礼状であることがわかります。「手初めの御葉」とは一番摘みの新茶のこと、「聞茶」とは新茶の味を試すための茶葉のことを意味します。

続いて「秀吉の御聞茶、唯今、遣わさる由に候。尤もに候」とあり、上林が豊臣(羽柴)秀吉にも聞茶を贈っていることが記され、両者が既知の仲であることがうかがえます。また、秀吉に敬称が附されていないことから、当時の利休の地位が推察されます。

さらに「壷ども、追々参らすべく候。何れも何れも、壷に懇を入れ頼み申し候」とあり、壷を持って参るので、どの壷にも新茶を吟味して詰めてくれるよう依頼しています。このことから、利休が上林の新茶を好み、とても気に入っていることがわかります。

参考文献
・『利休大事典』. 淡交社, 1989. [791.2/R 42]
・『秀吉と利休』. 中央公論社, 1964. [913.6/N 93]
・『手紙で読む利休の生涯：解説』. 同朋舎メディアプラン, 2007. [791.2/Se 71]

本との出会いと図書館の記憶

文化政策学科長 教授
森　俊太
Mori Shunta

中学から高校にかけては、家にあった文学全集や歴史のシリーズ本や、本屋で興味を引いた本を乱読、多読していた。中でも北杜夫の『どくとるマンボウ航海記』などの、「どくとるマンボウ」シリーズに読みふけった。家の本では飽き足らず、当時まだよくあった街中の小さな個人書店から、繁華街の大型書店、そして神田の古本屋街にも通っていた。また、当時は近所の個人書店が家に御用聞きに来ていて、雑誌や単行本を注文していた。中学生の時、新聞の書評で紹介されていた、アメリカの若者の意識変革について書かれたチャールズ・ライク著『緑色革命』（絶版）を読んでいたく興奮した。今になって考えれば、結果的にアメリカで大学と大学院に行くことになった無意識のきっかけであったのかもしれない。

高校1年の時、社会科学研究会という部活で、レーニンの『帝国主義：資本主義の最高の段階としての』の読書会があった。3年の先輩達は内容についてまともに議論していたように感じたが、私はほとんど理解できずショックを受けた。また、ベン・シャーン著『ある絵の伝記』（絶版）にも、刺激を受けた。シャーンは社会派リアリズムの画家で、社会性の強い作品を残しており、本の中では芸術と社会の関係について論じていた。さらになぜか、毛沢東の『実践論・矛盾論』も読んでおり、分かった気になっていた。

浪人中、イスラエルのキブツ（集団農場）のボランティア募集を知り、急遽、ユダヤ人やパレスチナの歴史について興味がわき、『旧約聖書』やホロコーストについて書かれたフランクルの『夜と霧』などを読んだ。結果的に1年弱、ガリラヤ湖畔の最も古いキブツに滞在し主に柑橘類の剪定や収穫などの農作業をした。滞在中の1976～77年は本格的な戦争は起きなかったが、防空壕がいたるところにあり、その一つが図書館だった。草でカモフラージュされた鉄の重い扉を開けて、狭いコンクリートの階段を下ると頭がつかえるような低い天井の壕があり、ひんやりとした空気の中、古びた本棚が薄暗い電灯に照らされて並んでいた。

帰国後、都内の大学に1年間通った後、アメリカの大学に編入しその後も大学院に進み、奨学金や助手、非常勤講師で食いつなぎながら20歳台はほとんどアメリカで過ごした。学部の時代から、リーディング・アサインメントといって、週に2～3コマある次の授業まで数十頁以上、時には100頁以上の文献を読んで、教員からの質問やディスカッションに備えなければならなかった。英語にハンディのある私は、アメリカ人学生の数倍、時には1日10時間ぐらいかけないと文献の内容を理解して授業についていくことが出来なかった。授業が終わると図書館に行き、深夜過ぎまで本や論文を読み、家に帰ってもノートにまとめたり、タイプライターでレポート作成をする日々が続いた。大学の図書館は深夜過ぎまで開館していて、司書が数人常駐しており、文献検索はもちろんの事、レポート作成などの相談にも乗ってくれた。ちなみに、図書館は授業が終わった金曜の夕刻から土曜までは閑散としていたが、日曜の昼過ぎから授業の予習や宿題のために学生が集まり始めた。学部生の時代、英語の専門書は分からない用語ばかりであり辞書の携帯は必須であった。通常の辞書に加えて、新書版ほどの大きさで分野ごとに分かれていたペンギン社の小事典シリーズは重宝した。日本語では『岩波小事典』シリーズがやはり新書版サイズでありながら解説も充実していて、用語を引くというよりも結果的にほぼ全項目を読みつくした。

日本語の本はほとんど読む余裕がなかったが、小田実の『何でも見てやろう』や土井健郎の『「甘え」の構造』は楽しんで読めた。また内容は重かったが本多勝一の著書、特に『殺される側の論理』には戦争やアメリカ社会の深層について考えさせられた。加藤周一の『日本文学史序説』と見田宗介の『現代日本の精神構造』の斬新な分析視点にも刺激を受けた。

社会学の大学院研究科では、ウェーバーやデュルケームの古典理論、マルクーゼやハバーマス他のフランクフルト学派、従属論や世界システム論、さらに、ゴッフマン、フーコー、サイードなどの著作をいやと言うほど読まされた。難解な理論書は、1行理解するのに1時間かかることもあった。例外は『精神分析入門』を著したフロイトで、語りかけるような文章はわかりやすく、特に*Civilization and Its Discontents*（文明とその不満）の議論の切り口には爽快感さえ覚えた。また、古典から現代の社会学関係の理論を広く解説した『社会学の新しい方法規準：理解社会学の共感的批判』などのギデンズの著書には、「あんちょこ」本としての価値があった。しかし実際は、その「あんちょこ」さえも理解するのに苦労した。研究科で博士論文執筆資格を得るためには口頭試問に合格する必要があり、それには社会学の中でさらに3分野を専攻として選び、複数の指導教員とともに選んだ各分野50点前後から100点ほどの本や論文を読破し、各分野の概要をまとめたレポートを書いて口頭試問に臨まなければならなかった。その前の3か月ほどは、図書館内に2～3畳ほどの個室を借りて毎日12時間以上籠り、住んでいたも同然であった。

学部生として在籍した大学には、手作りの本を作る印刷製本工房があり、電動アシストであったが手動輪転式の印刷機があった。その工房の責任者である美術の教授を手伝うことになり、植字から紙の裁断、印刷、製本までの全工程を学んだ。植字の時に文字の形によって微妙に使い分ける間隔用の銅、錫など厚さの異なる金属板の手触り、インクの付いたドラムが回る音とにおいなどが、五感を通じて今でも蘇る。自分の卒論も植字まではしなかったが、自らの手で製本した。論文の質はともかく、大事に研究室に置いてある。

本文中に登場した資料

北杜夫[著]
『どくとるマンボウ航海記』
914.6/Ki 61-1

チャールズ・A.ライク[著]; 邦高忠二[訳]
『緑色革命』
302.53/R 25

レーニン[著]; 宇高基輔[訳]
『帝国主義：資本主義の最高の段階としての』
081/I 95/W 146

ベン・シャーン[著]; 佐藤明[訳]
『ある絵の伝記』
723.53/Sh 11

毛沢東[著]; 松村一人, 竹内実[訳]
『実践論・矛盾論』
081/I 95/B 266

松田伊作（ほか）責任編集
『旧約聖書』
193.1/Ky 9/1-15

ヴィクトール・E.フランクル[著]; 池田香代子[訳]
『夜と霧』（新版）
946/F 44

宮島喬[編集]
『社会学（岩波小辞典）』
361.03/Mi 75

小田実[著]
『何でも見てやろう』
290.9/O 17

土居健郎[著]
『「甘え」の構造』
146.1/D 83/1

本多勝一[著]
『殺される側の論理』
081.6/H 84/17

加藤周一[著]
『日本文学史序説』（上）（下）
918.68/ Ka 86/4-5

見田宗介[著]
『現代日本の精神構造』
361.04/Mi 56

フロイド[著]；丸井清泰, 古澤平作[譯]
『精神分析入門』（上）（下）（続）
145.9/F 46/1-3

アンソニー・ギデンズ[著]；松尾精文ほか[訳]
『社会学の新しい方法規準：理解社会学の共感的批判』
361.16/G 42

デザイン学部長 教授
海野 敏夫
Unno Toshio

本文中に登場した資料

小林秀雄[著]
『小林秀雄全集』
918.68/Ko 12/1-12

泉鏡花[著]; 東郷克美,吉田昌志[校注]
『泉鏡花集』
918.6/Sh 64/20

オスカー・ワイルド[作]; 福田恆存[譯]
『サロメ』
081/I 95/R245-2

沼正三[著]
『家畜人ヤプー』
913.6/N 99

マルキ・ド・サド[著]; 澁澤龍彦[訳]
『悪徳の栄え』(上)(下)
953.6/Sa 13/2-3

三島由紀夫[著]
『三島由紀夫全集』
918.68/Mi 53/4

オッタヴィオ・ベルトッティ・スカモッツィ[著]; 長尾重武[編]
『パラディオ図面集』
523.37/B 38

エロス・タナトス

耽美という言葉はいつのころから使われなくなったのだろう? 少なくとも私の高校時代、今から半世紀前まではかなり頻繁に活字でも会話でも使用されていた。その当時から本屋の店頭にはハウトゥー物はたくさんあったが、今のような実利主義は蔓延していなかったような気がする。私は、人並みに昔話・人物伝・冒険譚・推理物・評論や小説等、年齢を重ねると共に一通りのものは読んできた。高校生になって少し背伸びして『小林秀雄全集』を読んだが、辞書は片時も離せなかった。

しかし、読書の傾向は、高校2年のときに出会った友人によって、大きく変化した。生を謳歌する思春期の年頃にあって、いやそれ故に、私は“滅びの美”というものに深い共感を得るようになっていった。そして、それらの作品群が持つ“生と死”の表現に魅了され、その根底に潜むエロティシズムを感じ取っていた。以後、私は読んでもいないのに自分の好まないものに触れようとしなくなった。その悪癖は今も引きずっている。

それからの読書遍歴は、ある種の偏りがある。大人の童話と呼ぼうか、泉鏡花の『高野聖』は、幽玄な世界を華麗な文体で表現している。オスカー・ワイルドの『サロメ』は、福田恒存の翻訳で読みたい。同時に、バックグラウンドにリヒャルト・シュトラウスの色彩豊かな音楽が鳴っていることが望ましい。ビアズリーの挿絵は秀逸であるが、私はギュスタヴ・モローの絵画を好む。

そのような中、衝撃的なS・Fに出会う。イースという未来社会を描いているのだからS・Fという範疇に入れても間違ってはいない。しかし、それは、当時からSM文学の極致といわれていた。沼正三の『家畜人ヤプー』である。日本人の末裔であるヤプーが、アングロ・サクソン系の白人の家畜になっている社会の話である。奴隷ではない、奴隷は人であるがヤプーは家畜だ。日本文化および日本人を愛する私にとって忌避すべき内容の小説であるが、これが頗る面白い。イース社会の描写や言葉遊びの表現、とりわけ性的な描写は解剖学的な乾いた表現により、作家の知性の高さを示している。このような、“反社会的”な本が本学の図書館蔵書にあることは大変喜ばしいことである。この本を強く推薦した作家には、三島由紀夫・澁澤龍彦・寺山修司等々の名があがる。危険な臭いを感じる人は読まないで頂きたい。

自然な流れとして、関心は澁澤龍彦翻訳の『悪徳の栄え』に向かった。翻訳内容が猥褻だと判断されて裁判になった事実は、今からすれば滑稽でありさえする。文学表現に禁忌はない。それは、読み手側の選択に委ねられるだけである。もし、サドが現代に生きていたら、その内容はあまり話題にならなかったかもしれないが、その獄中生活がフランス革命の過程とぴったり重なることは小説より奇なる事実である。

実は、ここに挙げた数冊の本は、すべて一人の作家が取り上げているものである。その作家は、四部作『豊饒の海』を脱稿して自死する。私は、仏教の唯識論を理解することができないし、その知識もない。しかし、この四部作で展開される“エロス・タナトス”の物語は、私の感性を刺激し、私にその“生と死”の匂いを嗅ぎ取るように迫って来る。主人公の転生を軸として展開する物語は、最後のシーンですべて覆る。あたかも、読み手を無限の底に引きずり込むようであるが、私は、むしろ天空に浮かぶ月の渇いた海へ導く螺旋の渦のように思っている。

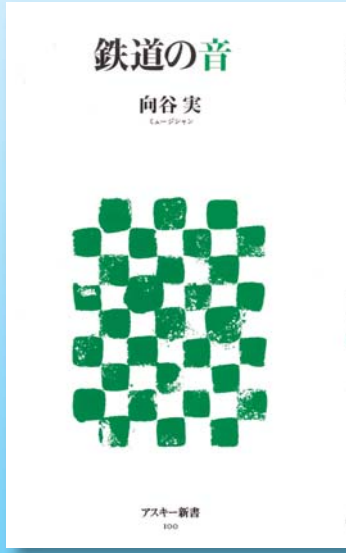
このような趣向を持つ私の専門は、建築の構造デザインである。日々数字の洪水と向き合う世界と、この文学的趣向は乖離しているようにみえるが、数字が持つ物語性を実感するとき、えもいわれぬ恍惚感を味わうことができる。自分の設計意図に数字が答えるときがその瞬間である。ここで、建築を志す諸君に観察して欲しい本を一冊挙げてみたい。それは、16世紀イタリアの建築家アンドレア・パッラーディオの『建築実測図面集』である。これは、パッラーディオのプロジェクトを引き継いだ建築家スカモッツィによるものである。この大判の図面集は、個人で所有するには大きすぎる。この図面集が本学図書館にある。近現代の建築美とは異なる、排除されてきた美がそこには確かにある。独特の様式美をつかみ取ってほしい。“Less is more.”を一度疑ってみるのもいいかも知れない。

さて、死の床にあって最後に聞く音楽は何がいいだろう? ブルックナーの交響曲9番のアダージョは大好きだが、この天上の音楽はどこか場違いな気がする。やはり滅びの美学からすると、「トリスタンとイゾルデ」の「愛の死」か。それもオーケストラバージョンではなく、ソプラノの声が入っていなければならない。愛の行為のうねりと共に近づく死の静寂、しかしその世界は閉ざされた闇ではなく、光に満ち満ちている。いや、それは、私に相応しい予期せぬ世界であるに違いない。『天人五衰』という言葉が、美しい響きと正反対の状況を意味するように。

特集　わたしの１冊　～おすすめの本を紹介します～

『鉄道の音』

向谷実 [著]
アスキー・メディアワークス , 2009.3
[686/Mu 24]



私がおすすめしたい1冊、ということで、私の趣味である鉄道に関する向谷実著『鉄道の音』という本を紹介します。

はじめに、著者の向谷氏は、ミュージシャンであり、音楽プロデューサーであり、同時に鉄道ファンでもあるという人物です。近年では、ミュージシャンとして活動する一方で、九州新幹線や京阪電気鉄道、阪神電気鉄道の発車メロディ等の制作を担当しています。本書は、音楽業界随一の鉄道ファンの向谷氏が、自身の半生を振り返って、作曲についてのこと、あらゆる場面で聞こえてくる鉄道に関する音についての魅力が書かれています。そして後半の資料ページは圧巻で、アナウンス・喚呼集と京阪電車発車メロディ解説集まで付いており、かなりマニアックな鉄道の世界が広がっています。

私がおすすめしたい理由は、何気ない日常の音でさえも音楽として楽しめるということを提案したいからです。改札、構内アナウンス、電車の接近音、走行音、発車メロディ、ドアの閉まるエア音、モーター音、車内アナウンス、レールのジョイントの音などなど。駅に行き、電車を待ち、乗って目的地に着くまでにこれだけ多くの音がしているのに、私たちは気にも留めず移動します。余裕がないのか興味がないのかはともかく、私たちは音楽というものを考えるとき、どうしてもクラシックやロックバンドなどを想像します。しかし本来音楽というのは文字通り音を楽しむものであり、周りにある音は捉え方を変えると、すべて立派な音楽であるのではないか、とこの本を読んで思ったのです。興味のない人には「何がおもしろいの?」と言われるかもしれませんが、向谷氏や私にとって魅力を感じたのは鉄道の音であっただけのことなのです。日常の音を再認識し、楽しむ(鉄道ファンならより一層のこと)きっかけになる1冊であると思います。

年末年始、春休みと旅へ行かれる人もいると思います。出発駅と終着駅で旅の始まりと終わりの音に耳を澄ませてみてはいかがでしょうか。

【文化政策学部 文化政策学科 3年　田辺 恒太】

『ソフィーの世界：哲学者からの不思議な手紙』

ヨースタイン・ゴルデル [著]; 池田香代子 [訳]
日本放送出版協会 , 1995.6
[949.63/G 11]

みなさんは「哲学」という言葉からどのような印象を受けるのでしょうか。堅苦しい、よくわからないといったイメージを持つ人もいるかもしれません。この本は「世界一やさしい哲学の本」と言われ、世界的にベストセラーになった1冊です。私がこの本を初めて手に取ったのは中学生の時でした。2000年にエリック・グスタヴソン監督によって映画化されたものをテレビで見たことがきっかけです。映画を見た翌日に学校の図書館で600ページもある分厚い本を借りて読みふけりました。当時は初めて触れる哲学というものに戸惑い、内容の半分も理解できていませんでした。しかし、子供の頃からファンタジーな物語が好きだった私は、不思議な世界観と共に綴られる物語に魅了され、一気に哲学という世界に引き込まれていきました。

『ソフィーの世界』は主人公のソフィーという女の子と、謎の人物アルベルトの対話形式で、時折不思議なエピソードが織り込まれながら物語が進んでいきます。まもなく15歳をむかえるソフィーのもとに「あなたはだれ?」「世界はどこからきた?」といった不思議な手紙が届くところから物語が始まり、ソクラテス、プラトン、アリストテレスなど西洋の哲学者について少しずつ学んでいきます。しかし、ソフィーが中心となっていくと思いきや、ソフィーのもとに突然「ヒルデ」という少女へのメッセージが届きます。実は、ソフィーたちの世界はヒルデの父がヒルデのために書いた本の世界で…この何度もどんでん返しがおこるおもしろさに、読者はどんどんひきこまれていきます。哲学の難しさをあまり感じさせることなく、すらすらと読むことができます。

哲学のおもしろさは、哲学者の考えを通して新たな視点を発見できる点にあると考えます。この本を読んだことがきっかけで高校では倫理を選択しましたが、多くの哲学者の考えを知ることは自分自身の価値観を広げることにも繋がりました。哲学ってなんだか難しそうと思っている人に、ぜひお勧めしたい1冊です。

【デザイン学部 メディア造形学科 4年　柳本 薫】

特集　わたしの１冊　～おすすめの本を紹介します～

ちょうど都市デザインのコンペに関わっていたので、この本を参考にと読み返していたのですが、横浜のまちづくりの意味や価値が改めてストンと腑に落ちました。著者の田村明氏は、地域計画コンサルタントから市役所に入り、役所の縦割り組織や事業を横つなぎにする企画調整室を立ち上げ、現在の横浜のまちづくりの原点となり、都市デザインを実践した人物です。

横浜という多くのひとが訪れる魅力的なまちが、戦後の荒廃地から現在の姿に至るまで、どんな現実があり、戦略があり、プロジェクトが実践されてきたか。まるで公共のデザインの教科書みたいな本ですが、語り口は平明で読み物としても面白いと思います。まちづくりの本やガイドラインは得てして事例の羅列になったり、むずかしい制度論になったりしがちです。この本は、市役所のバルコニーに半分はみ出して増築された企画調整室の部屋の描写から始まります。部屋には、大テーブルがあって内部外部の関係者が議論し、壁には大きく地図や図面が貼ってあるところで横浜市の構想が練られていきます。1983年初版ですから、ちょうど私がデザイン実務1年生の頃です。私も大テーブルの末席で、懸命にデザイン案を打ち合わせるのですが、担当の方におこられたりしながら鍛えられました。

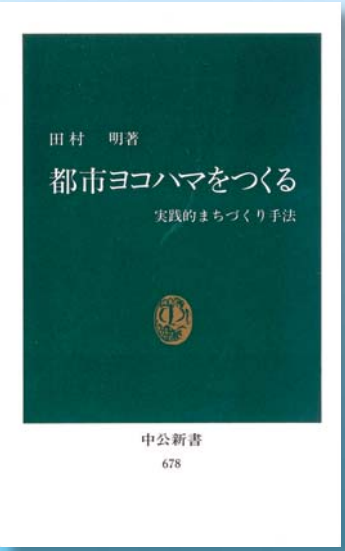
企画調整室の初仕事は、当時の建設省（現国土交通省）が計画した高架の高速道路を横浜都心部では地下化するように「調整」することでした。いま考えても大変なことだと察せられますが、困難の末に高速道路は地下化できました。企画調整室は、自治体内の縦割りを横つなぎするだけではなく、国から地方自治体にわたって縦割りされた事業を市民のために都市デザインしたという原点を持つことができたのです。

そのほか、横浜の現在の姿がいかにして実現されて来たか。田村明氏は、それらの都市デザインの実践を苦労話に偏ることなく、プロジェクトの意味や、価値や、実現するためのしたたかな戦略を生き生きと語っています。30年以上前の本ですが、都市デザインのヒントが満載された刺激的な一冊です。

【デザイン学部 デザイン学科 教授　磯村 克郎】

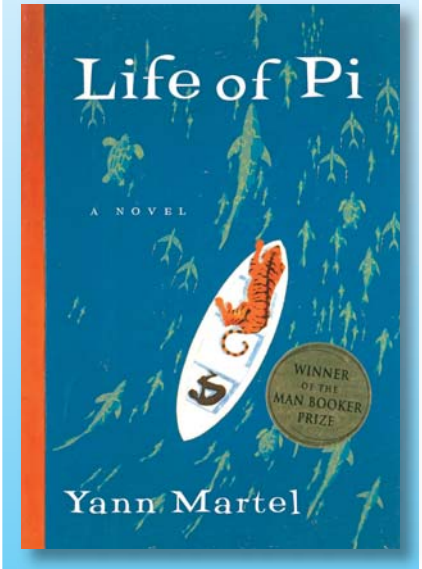
『都市ヨコハマをつくる：実践的まちづくり手法』

田村明［著］
中央公論社，1983.1
[081/C 64/678]



“Life of Pi : a novel”

Yann Martel［著］
Harcourt, 2001
[933.7/Ma 53]



今回は、私が英語学習を再開した時に出会った本を紹介します。

“Life of Pi”（原題）「パイの物語」（邦題）。Yann Martel著のこの小説は、2002年に世界的に権威のある文学賞であるブッカー賞を受賞しています。よく冒険小説と紹介されていますが、それを期待すると裏切られます。確かに主人公は漂流しますが、その描写を通じて、生きること（死ぬこと）を多様な視点で表現することに重点が置かれています。最終章の急速な展開で、読者は何を信じるのかを問われますが、答えはありません。そもそもフィクションなのですから。

しかし、私がこの本でみなさんに楽しんでいただきたいのは、その答えを考えることではなく、パイが漂流中に体験する幻想的な世界の描写（この部分の意味が分からなくて長すぎるという読者もいるようですが…）です。最初に読んだのは英語で書かれた原文でした。英語学習には英語の本を多読すると良いと聞き、この本を手にとりました。幸か不幸か、英語力が未熟であるおかげで想像力がフルに働き、読み進めるにつれその幻想的な世界に魅せられていきました。

“Life of Pi”は映画にもなっています。第85回アカデミー賞で、監督賞、作曲賞、撮影賞、視覚効果賞の4部門を受賞しました。冒頭のパイの紹介部分と漂着後の部分は淡々と表現され、それとは対照的に、漂流中にパイが見た生と死の関係を象徴する世界の映像は美しく幻想的で、観る者を惹きつけその世界へ引き込みます。その映像のイメージは、最初に原文で読んだ時の印象にとても近く、生と死、連鎖、輪廻についてさらに深く感じました。しかしそれは、英語の原文で読んだことによって想像で膨らんだ仮説が、日本語版で明確に修正されるとともに翻訳者の解釈が添えられ、さらに映画の映像によってヤン・リー監督の解釈が加わって、より多角的に楽しめたからであるように思います。

みなさんも英語学習を兼ねて、是非原文から読んでみてください。

【デザイン学部 デザイン学科 教授　高山 靖子】

特集　わたしの１冊　～おすすめの本を紹介します～

『パパラギ：はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集』

ツイアビ [著]; 岡崎照男 [訳]
学習研究社 , 2005.5
[304/Tu 3]

私が『パパラギ』に出会ったのは日本にきて2,3年経った頃でした。ブラジルから留学生として来日し、日本の言語、習慣や文化に戸惑うことが多く、日本の生活に慣れるのにいろいろと悩んでいた時、『パパラギ』を読んで気持ちがホッとした感じでした。それは、自分の常識は、身分にしか通用しないこと、そして違う環境では、違う常識があると素直に受け入れられたときでした。

「パパラギ」とは何か？誰なのか？「石の箱」や「むしろ」とは何？とにかくこの本を読むと、私たち日頃知らない相手や環境に対する知識や理解がどれほど誤っているのかを考えさせられます。普段、違うことに対して、我々は自分の知識や常識を基準に相手を評価してしまいます。そして、我々の方が良い、相手の方が悪いといった評価になりがちです。

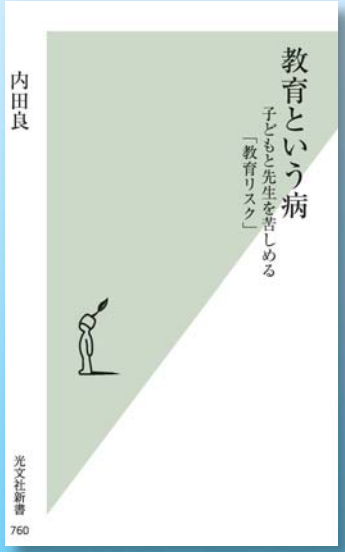
『パパラギ』にでてくるツイアビ酋長が、南の島からはじめてヨーロッパに行き、それまで見たことも体験したこともないことに出会い、率直な感想で「文明社会」に対する感想を述べています。最初はおもしろおかしい話だと思ってしまいますが、読んでいるうちに自分の常識や考え方の方がおかしいのではないかと思わせてしまいます。

日本では多文化共生やグローバル人材といった言葉が多く聞かれる今日ですが、私たちはその概念をどのように認識しているのでしょうか。日本の「常識」が基準になって外国や外国人の評価を下しているのではないでしょうか。まずはツイアビ酋長の言葉に耳を傾けて、こんどは日本人が外国人からどのように見られているのか想像するのもおもしろいでしょう。この本を読むと、日本文化、つまり自分の「常識」にどれだけ視野が狭められているのかを考え直すきっかけになるでしょう。

【文化政策学部 国際文化学科 教授　イシカワ エウニセ アケミ】

『教育という病：子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』

内田良 [著]
光文社 , 2015.6
[370.4/U 14]



小中学校の運動会で、組体操をした事があるかと思います。その組体操が現在、巨大化、高層化、高速化によって事故が頻繁におきていることをご存じでしょうか？

組体操のように、目から鱗の教育現場のリスクを、この本ではエビデンスを用いて解説しています。私たちが「聖なるもの」「善きもの」と信じている「教育」は本当に安心・安全なのだろうかという点において、学校教育の問題は、「善さ」を追い求めることによって、その裏側に潜む「リスク」が忘却されてしまうこと、さらにそのリスクを乗り越えたことによって、必要以上に「すばらしい」と捉えてしまうことによって起きている、と著者の内田良氏は指摘します。

とりわけ私にとって関連深いのは、第5章の「柔道界が動いた-死亡事故ゼロへの道のり」です。学校現場での柔道事故についていち早く指摘したのは内田氏であり、この結果、全日本柔道連盟や教育委員会では事故再発防止に向けた取り組みが図られました。

内田氏の指摘は、関係者にとって痛烈なエビデンスになりましたが、そのことによって真摯に受け止め再発防止に努めようと多くの柔道関係者が衿持ちを正しました。

そもそも学校体育やスポーツには、「集団の目的を果たすために、もしくはチャンピオンになるためには、怪我をしても無理してもやり通す精神力が必要」とリスクを誘発するような場面がしばしばあります。とはいえ、無理にも限度があります。個人差もあります。チャレンジの前にどれくらいのリスクを背負っているのかを知ることで、子供も先生も保護者もリスクを回避することもできます。閉鎖的な空間では、一方的な情報になり、感動や美学（哲学）の名の下に誤った認識で、指導やトレーニングをしてしまう傾向があります。この本は、ぜひ教員志望者、スポーツ関係者に読んでいただきたいです。

【文化政策学部 国際文化学科 准教授　溝口 紀子】

特集　わたしの１冊　～おすすめの本を紹介します～

最初に聖書を知ったのは、高校時代に友人に勧められて見たTVアニメ「新世紀エヴァンゲリオン」でした。2015年の日本を舞台にしたその物語は、天使の名を冠した生命体と人類が戦うものであり、劇中に登場する用語をネットで調べると、多くが聖書から引用されていました。

意識すると聖書に影響された美術や文学作品は多く、様々な分野に影響を与えていることに気づきます。日本のサブカルチャーでは悪魔の息子がキーマンの「青の祓魔師」や「MONSTER」、スマートフォンゲームでは「モンスターストライク」や「パズドラ」にルシファーやアスタロトなど多数の悪魔が登場しています。

また「とある魔術の禁書目録」「METAL GEAR SOLID5」など、悪魔に関係なく引用している作品も多く、物語の創作にクリエイターが聖書を用いるのは、日本でも同じなのだと分かりました。

こうして間接的に関わってきて、いざ読んでみようと思ったのが今回紹介する「新共同訳聖書」です。聖書と言えばユダヤ教やキリスト教の聖典であり、読むと頭が狂うのではないかという恐怖があったので、宗教的偏りの少ない2大宗派が共同で訳した本書を選びました。実際は神の教えが羅列されていることはなく、家族と暮らす主人公の所にたまに現れて、助言や手助けをして去って行く程度でした。

内容を現代と比較して面白いのは、神が偶像崇拝を禁じていることです。木彫はただの木だし、鋳造物はただの金で、そんな物拝むなと言っています。一方、今の信者は十字架や聖母像など偶像を拝んでいます。

また「バベルの塔」という話では、一部の人々が神に代わって自分たちの声を世界に広げようと高い塔を建てますが、神が計画を阻止し、人類の言語もバラバラにしました。現代では英語を共通語にグローバル化が進められ、国や人種の壁が消えつつあります。世界を一つにというのは聞こえは良いですが、統括する人々に権力が集まるのは良いことなのか、「バベルの塔」はそれを暗示しているような話です。

聖書は変に解説書などを読まず、気軽に物語として楽しむのが良いと思います。上記以外にも興味深いエピソードが様々あり、多くのクリエイターが引用しているだけのことはあるな、というのが本書を手に取ってみての感想です。

【大学院 デザイン研究科 1年　新田 祥平】

『聖書：新共同訳』

共同訳聖書実行委員会、日本聖書協会 [著]
日本聖書協会 , 1996
[193/Ky 2]

『池上彰の18歳からの教養講座：現代世界を知るために』

池上彰 [著]; 日本経済新聞社 [編]
日本経済新聞社 , 2015.11
[304/I 33]

「今回、温故知新の特集で『わたしの１冊』を企画したので、情報室長として何か自分の好きな本を紹介してください。」「わかりました。」「マンガはダメですよ。学生に推薦できる図書にしてください。」「えっ！さて困った。」

というわけで、私はあまり図書といわれるものを読んでいません。マンガなら、たぶん学内で一番読んでいると思うのですが。そこで、自宅の寝室にある多くのマンガの中で、マンガ以外の図書を探したところ、「教養」について考えるのによいと思って買った本がありました。

日本経済新聞の連載企画などをもとに書籍化されたこの本は、日々報道されるさまざまなニュースを、著者である池上さんの語り口のように易しく読み解いていきます。著名なジャーナリストであり、大学での講義も行っている著者が、現代史から近年の社会の流れを解説しているもので、現在の国内情勢や世界情勢について分かりやすく学べます。基礎知識として本学の学生にこの程度は知っておいてほしい、ということでこの本を推薦します。また、教養教育の必要性、読書の重要性も説いているので、職員の方にもお薦めします。

本書の項目には「学ぶ力を持つということ」「3・11という『第2の敗戦』からの復活」「テロを生んだもの、テロを終わらせるもの」などがあり、いずれも興味深い内容です。文庫本で発行されたばかりで、私がお金を出して買ったマンガ以外の貴重な本です。

…でも、私の本当のお薦めはやはりマンガで、西原理恵子著「はれた日は学校をやすんで」は名著だと思いますし（題名からして素敵だと思いませんか）、同氏と本学客員教授の佐藤優先生が週刊新潮に連載している「とりあたま大学」も楽しくてよいと思います。私も還暦を迎えますが、お気に入りのアニメ再放送「あの日見た花の名前を僕たちはまだ知らない」を見て涙している今日この頃です。社会人としてのお手本にならなくてごめんなさい。

【事務局次長兼情報室長　天野 正弘】

ユニバーサルデザイン絵本コンクール2015を開催しました

静岡文化芸術大学では、身体的・知的特性、年齢、文化などを越えて、皆が一緒に楽しむことのできるユニバーサルデザインの考え方を採り入れた絵本を募集し、「ユニバーサルデザイン絵本コンクール2015」を開催しました。受賞作品は以下のとおりです。多数のご応募ありがとうございました。

■大賞（該当作品なし）
■ユニバーサルデザイン研究賞
「いろどろぼうとくろうさぎ」（静岡文化芸術大学2年 辻村夏美）
「イメージング ボックス(imaging box)」
（愛知県立蒲郡東高等学校3年　野村祐衣）

《子ども部門》
■優秀賞
「しっぽずかん」（浜松市立有玉小学校4年 橋本麻利）
「しっかりできるかな?」（袋井市立袋井中学校2年 本多深愛）
「まるくんたちのぼうけん」（袋井市立袋井中学校2年 鈴木貴水）
■佳作
「触って遊べる布絵本」（宇城市立中央図書館）
「ゆめのなかのぼうけん」（浜松市立佐久間小学校3年 守屋志乃）
「おるすばん」（袋井市立袋井中学校2年 味見美玲）

《高校生部門》
■優秀賞（該当作品なし）
■佳作
「すきな色なーに?」（浜松日体高校2年 山崎なつみ）
「ぼくのきもち」（静岡県立浜名特別支援学校高等部2年 安田幸大）

《一般部門》
■優秀賞
「なにができるかな」（てのひらの会）
■佳作
「ひとりぼっちのたね」（百井紘子）
「ぼくの木、わたしの木、みんなの木」（清水麻子）

※受賞者の敬称は省略させていただきました。

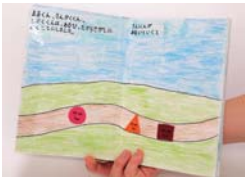
表彰式（受賞者のみなさん）

いろどろぼうとくろうさぎ

イメージング ボックス（imaging box）

しっぽずかん

しっかりできるかな?



まるくんたちのぼうけん

触って遊べる布絵本

ゆめのなかのぼうけん

おるすばん

すきな色なーに?

ぼくのきもち

なにができるかな

ひとりぼっちのたね

ぼくの木、わたしの木、みんなの木

作品展示会

編集後記

今回、2年ぶりに「わたしの1冊」を復活しました。いかがでしたか?原稿を読むと、いろいろな見方や考え方があるんだなあ、と気付きます。好きな本のことを紹介するのは、きっと良い経験になります。次回は、今これをお読みのあなたに執筆をお願いするかもしれません。その際には、ぜひ協力してください。（直）